

北陸病害虫研究会50周年にあたって

佐藤 昭 夫

北陸病害虫研究会は1949年2月18日に長野県農業試験場で発会されたとあり、会報1号は翌年50年1月30日に発行されている。内容は前年度に行われた第1回の講演要旨集であるが奥付によると「代謄写」とあり、当初は謄写印刷で後から本印刷されたようで、あとがきからみると49年8月10日に脱稿しているようである。表紙の表題は「北陸病害虫研究会會報」と現在の当用漢字にない字が使用されていたことは時代を思わせるものがある。50年4月から農事試験場北陸支場も北陸農業試験場と地域農試に改組、発足当時の強力メンバーだった長野県が関東東山病害虫研究会の傘下となり、こちらの研究会への出席など色々ご不便をおかけしたにもかかわらず、その間の事情をご理解されて続いてご協力いただき感謝しています。

発足当初の会長は秋濱浩三北陸支場長で、中心になられたのは杉山章平氏と小野小三郎氏だった。杉山氏の後任として来られたのは「酒の上の田村磨」とも称された酒豪の田村市太郎氏で、63年に編集兼発行者となって実質リーダーに、69年から退官される75年まで常任の会長とられた。この間研究会の冒頭には「田村節」なる名演説があり、会報にも瀟洒なコメントなどいただいた。

発足の目的は管内における病害虫研究の向上並びにその防除法普及の徹底とあり、研究会では各県の試験場・大学研究員のみならず農業改良普及所や病害虫防除所職員の発表・討論も加味され、会報にも、普及技術の広場から、ブロック会議たより、病害虫防除指針、新農薬の企画たよりなどが折り込まれており、実用性と速報性が高く評価され、管内はもちろん管外からも沢山の購読者もあった。

研究会の発表や会報から害虫関係の内容をみると地域の特性上稲作害虫が多く、当初は猛威を振るったニカメイガ、イネカラバエなどの防除、続いてカメムシ、ドロオイムシ、ウンカヨコバイ類、それに対する農薬のスピードスプレー、ヘリ撒、水面施用など大面積・省力防除、それを支える要防除水準の確定などが討議された。一方水田転換畑も含め大豆や野菜、果樹の害虫も取り上げられ、ネズミの研究が地道に続けられている。

筆者が北陸農試に赴任したのは70年の5月で、早速幹事をおおせつかったが、管内県農試の害虫責任者が大ボスから前後して筆者と同世代に変わり、これらの方々に援けていただいて83年まで13年間なんとか無事に努めることができました。研究会は冬期のブロック会議や植物防疫関係の会議に連結して行なわれ、先ずは雪との事が思い浮かばれる。赴任翌年の71年2月富山で初めての研究会に出席した時、泥靴のまま会場の赤絨毯の上を歩くのを驚いたのが初体験であった。また年次は忘れたが確か福井で行なわれた研究会の際大雪警報が出て、地元福井と北陸農試の発表を次々と省略、午後早々の列車で帰途に就いたが案の定列車は大延着、10時間ばかり列車に閉じこめられてほうほうの体で逃げ帰ったこともあった。この間研究会では72年に当時の減反政策から増加した休耕田の病害虫対策でシンポジウムが行なわれた。74年には北陸各県で原因不明の穿孔米が発生し、各県の農試・防除所などの協力で犯人？はイネゾウムシと判明して注目を浴び、76年愛知県侵入が確認されたイネミズゾウムシが80年から82年にかけて侵入して、その対応が研究会で次々に発表され、両ゾウムシの対策に対する速報性がおおいに評価された。

北陸農試も法人に組織変えとなってこれからが大変ですが、研究会も発足当時の目的に沿って北信越の病害虫防除の要としてなおさらの発展を希望してなりません。